

三章二節 物を実体化しない（法無我）

自分自身の認知行動のプロセスを眺めてみれば、感覚や知覚、情動や感情、思考や概念、欲求や意志といった心的要素群が相互に影響し合い、行動に帰結しているのが分かる。感情は思考を生み、思考は感情を生む。そして感情と思考のうねりは特定の反応パターンや行動を生む。そこには疑うことのできない「心的因果のプロセス」がある。この心的因果のプロセスの内に自由意志の感覚は生成する。

驚くことに、今日の極端な物質主義者は、この自由意志の感覚のもとになる心的因果のプロセスは、物理的世界に対して全く因果的効力を持っていないと考えている。自分自身の心の中でクオリアの連鎖（心的プロセス）が自分自身の行動の直接原因になっているように感じられるのは、イリュージョンのようなものであると彼らは主張する。彼らに言わせれば、真に因果的効力をもっているのは心的因果のプロセスではなくて、心的因果のプロセスに相関する「物的因果のプロセス」のほうである。私たちが何かを見るとき、聞くと、喜怒哀楽を感じる時、思考や推論をする時には、その心的活動に相関する物的因果のプロセス（化学物質、神経細胞、身体組織などの物質の活動）が存在しているが、この心の活動に相関する物的因果のプロセスこそが、物理的世界において真の因果的効力を発揮する。喩えるなら、物質主義者にとって心的因果のプロセスは、金魚の糞のようなものである。それは物的因果のプロセスにただ付随しているだけであって、この物理的世界に対しては何の効力も持たない。あたかもそれが因果的効力を持っているかのように感じられるのは、それに相関する物的因果のプロセスが併存しているからである。

話を分かりやすくするために、今ここで意識経験のプロセスを「 $C^1, C^2, C^3 \dots$ 」とし、その意識経験に相関する物質活動を「 $M^1, M^2, M^3 \dots$ 」としてみよう。経験的には、明らかにCのプロセス（意識活動そのもの）が原因となって、行動が制御されると自覚されている。しかしながら、現代科学のように客観的存在である物質を基準にすれば、Mのプロセス（神経活動など）が原因となって、行動が制御されていると理解されるようになる。つまり、そこには見かけ上二つの異質な因果のプロセス——心的因果のプロセス（ C^n ）と物的因果のプロセス（ M^n ）——が存在していることになる。

普通の人々は、心的因果のプロセス（ C^n ）が実在しているのを疑うことはまず無い。主観的な意識そのものが疑いなく存在するように、心的因果のプロセスも疑いなく存在する。欲求や感情が行動を生み、思考や推論が行動を生み、そして、その行動が世界を変えていく。しかしながら、このような常識的見解に反して、徹底した物質主義の立場の哲学者や科学者らは、実際のところ人間の行動を支配しているのは物的因果のプロセ

ス (M^n) であって、心的因果のプロセスはイリュージョンのようなものだと考えている。彼らは、欲求、感情、思考、意志といった心的活動ではなく、それに相関する物質の活動こそが、実質上の人間行動を支配していると考えている。彼らに言わせれば、意識が物質存在のカテゴリーに属さない「非物質」であるのならば、その非物質としての意識は物理的世界に対して何一つ因果的効力を持つことは無い。物理的世界は因果的に閉じている。(唯物論的立場で言えば) 幽霊や靈魂が物理的世界に対して何の影響力も持たないように、意識という非物質も物理的世界に対しては何一つ影響を与えることは無い。喩えるなら、意識や心は、工場の煙突から漂い出る煙のようなものである。それは実際の事象(工場の生産活動)に対しては何の影響力も持たない。意識はただ神経活動に付随しているだけの傍観者である。

統合場のモデルの立場から言えば、このような「二重」の因果プロセス (C^n と M^n) の存在とそれにまつわる混乱した議論は、最初に述べたようにモノを実体化することから始まっている。モノを実体化することによって、心とモノの特性は明瞭に二分され、「存在の二元性」と「因果の二元性」が同時に生まれてくることになる。通常、そのような二元性を前提にして私たちの日常生活は成り立っているのだが、その見かけ上の二元性を頼りにして、そこに真実を求めれば、結果としてそこに論理的な矛盾や難題を抱え込むことになり、その解決のための不毛な哲学的議論が永遠に繰り返されることになる。

真実においては、二つの分離した実体は存在しない。また、二つの分離した因果プロセスも存在しない。それは見かけ上、二つの異なる「場」として現れ、そこにおいて二つの異なる因果プロセスとして認知される。統合場の秩序の中から意識場は生まれ、その秩序性は心的因果のプロセスとして顕現する。また、統合場の様々なレベルでの秩序単位は物質存在として実体的に認知され、その論理的秩序性は物的因果のプロセスとして合理的に理解されることになる。この二つの因果プロセスは、本来、分離独立してはいないし、相互に影響し合うこともない。また、一方が優勢で、他方が劣勢であるわけでも無い。

心的因果のプロセスは、主観的現象としては真実である。また、物的因果のプロセスは、客観的現象としては真実である。それらは相対的真実であり、それぞれの見方においては正しい。しかしながら、一方に固執し、他方を排除することは極端な見方であり、誤りである。

仏教の思想や哲学は、私たちの真実に対する暗闇(無明)は、自己そしてモノを実体化するところから始まると指摘する。世間的なレベルの話は別にして、真実においては、

モノも自己と同様に、それ自身が他と分離独立して在るような実体として規定すべきでは無い。真の在り方と現れ方を区別無く混同すべきではない。